

N A

R O

「広報なる」

特集

イチゴのこれから



National Agriculture
and Food Research Organization

No.
37
2025

イチゴの これから

食卓を彩る小さな宝石、イチゴ。

もっとおいしく、

もっと生産しやすくするため、

最先端テクノロジーを活用した

研究が進められています。

スマートで新しい

イチゴ栽培の未来をご紹介します。

NARO No.37 2025

CONTENTS

特集1

研究ピト

03 イチゴ栽培の最前線

11 小倉 真里奈 研究員

農研機構 野菜花き研究部門
野菜花き品種育成研究領域
施設野菜花き育種グループ

特集2

NARO TOPICS

09 農研機構生まれ！ イチゴ品種ガイド

13 PRESS RELEASE

WHAT is NARO?



わが国の農業と食品産業の発展のため、基礎から応用まで幅広い分野で研究開発を行う機関です。この分野における国内最大の研究機関であり、全国各地に研究拠点を配置して研究活動を行っています。

WEBSITE



農研機構のウェブサイトはこちらから！
<https://www.naro.go.jp>

VOICE from NARO

日本のイチゴ生産を変える

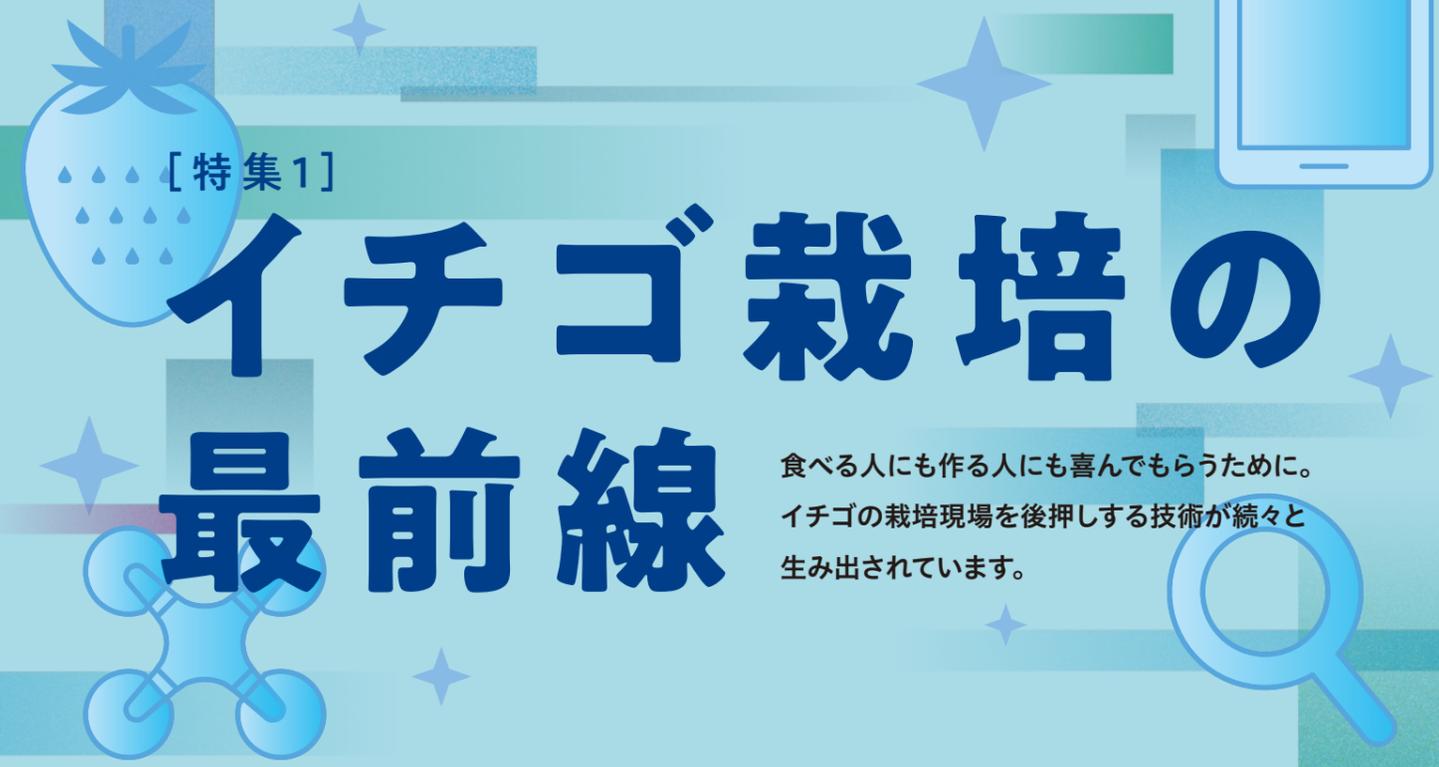
野菜花き研究部門 所長 東出 忠桐



日

本日のイチゴでは、これまで以上にたくさんの品種や栽培技術が開発されており、高品質でおいしいことは国内外で知られています。品質の高さからイチゴの海外輸出が求められる一方、国内のイチゴ生産者数や生産量は減少傾向にあります。これまでのイチゴ生産は、各県独自の品種を独自の装置で栽培するための開発が多く、共通技術よりも個別技術の開発を重視してきたといえます。トマトのような施設作物では、苗の購入、大規模化、周年雇用が当たり前となっているのに対し、イチゴでは小規模で労働負荷の大きな生産が続くのが現状です。

日本のイチゴ栽培の多くは12月～5月に収穫し、6～11月に収穫がないため、収入のない期間がトマト等よりもはるかに長くなっています。また、育苗は、栄養繁殖により、収穫終期から夏場まで生産者が自ら行うため、大量の苗を生産するのは容易ではありません。これらの理由から、イチゴ栽培で周年雇用や大規模化が進まなかったといえます。この問題を解決するために種子繁殖型品種の開発が進められており、将来的にはイチゴにおいても苗生産の分業化、大規模化が進むと予想しています。このほかにも農研機構では、生育予測等のICTやAIを利用した生産技術およびさまざまな特徴を持つ高品質な品種を開発中です。これらを組み合わせた技術体系により、日本のイチゴ生産を変えることが可能と考えています。



[特集1]

イチゴ栽培の最前線

食べる人にも作る人にも喜んでもらうために、イチゴの栽培現場を後押しする技術が続々と生み出されています。

プログラム(API)利用の流れ

利用者が栽培環境や栽培情報、葉面積情報などを入力すると、本ツールを搭載したアプリケーションやWEBサービスを介して、各種予測結果が出力されます。

入力する情報

- 栽培環境**
 毎日の日平均気温、日積算日射量、CO₂濃度
- 栽培情報**
 品種名、開花日、苗を植えた日など
- 葉面積情報**
 日付や葉の面積など



出力される情報

- 総乾物生産量**
 葉や花房、果実など株全体の重さ
- 日収量**
 一日で収穫できる量
- 積算収量**
 日収量の累計

イチゴの生育・収量予測ツールをWAGRIで公開

POINT 1

広く栽培されている4品種に対応(拡大中)



経験の有無にかかわらずスムーズな栽培を支援

POINT 2

農業データ連携基盤(WAGRI)とは気象や農地、収量予測など農業に役立つデータやプログラムを提供している、農研機構によるクラウドサービスです。野菜花き研究部門では、WAGRIを介して利用可能なAPI「NARO生育・収量予測ツール」を開発しており、その中にイチゴの生育や収量を予測する「NARO生育・収量予測ツール②イチゴ」を追加しました。本ツールでは、栽培施設の環境や栽培情報などを入力すると、生育や収量に関する予測データを得られます。イチゴは品種ごとに生育特性が大きく異なりますが、本ツールは全国で広く栽培されている4品種に対応しており、その数は今後も拡大予定です。これまで生産者の勘や経験値に頼る部分の大きかった生育・収量予測を誰にでも可能にすることで、栽培や販売、経営判断がしやすくなることを期待されます。

目標の収量に合った栽培環境が分かる!

「ハウス内の気温が○℃の場合の収量は?」「CO₂濃度が○ppmの場合?」と、条件を変えながら収量のシミュレーションができるため、目標の収量を得るために適した栽培環境を知ることができます。

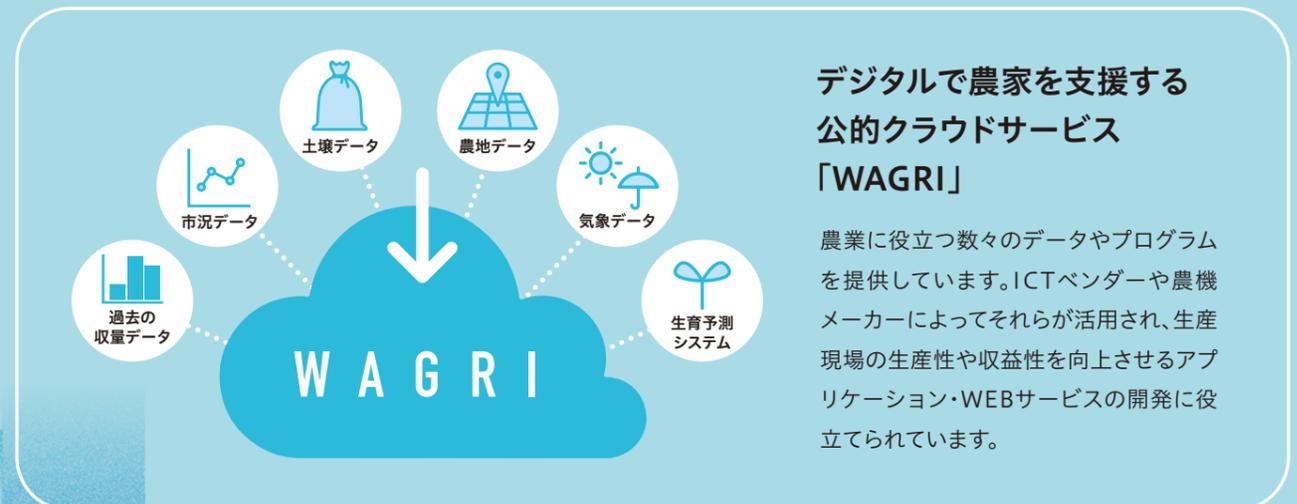
収量予測を見て、販売管理が可能に!

実際の気象予報データを用いることで、2週間先までの収量予測が得られます。これにより、「どこに、どれくらい出荷できるか」など具体的な販売計画を立てることができます。

野菜花き研究部門
施設生産システム研究領域
施設野菜花き
生産管理システムグループ
杉山 智美 研究員



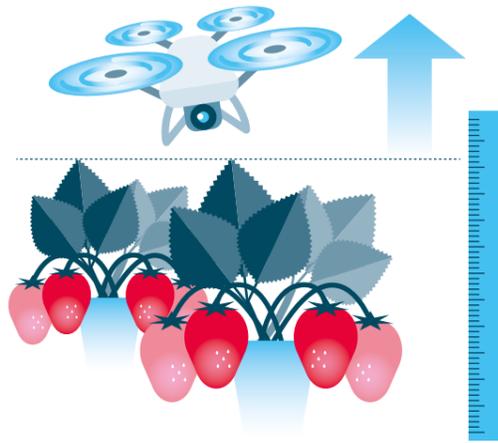
普段はイチゴの栽培研究をしています。本ツールの開発ではプログラミングに挑戦しました。イチゴ栽培を始めたばかりの方にも、ベテランの方にも役立てていただけたら幸いです。



ドローンを活用するために

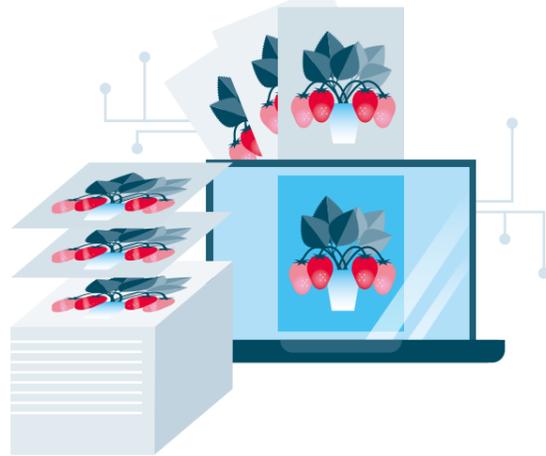
植物が傷つかない高度を探す

実験室内での風洞実験や、ハウス内での実証実験を重ね、イチゴに負荷を与えずに目的の観測が行える最適なドローン飛行高度を特定しました。



イチゴ株を検出するAIモデルの構築

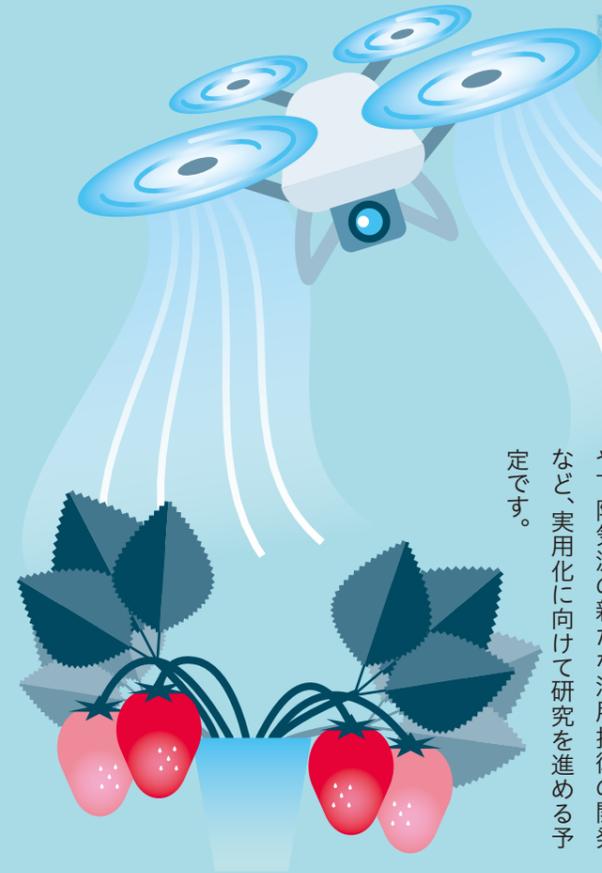
ドローンの映像からイチゴ株を個体識別する技術を確立するため、さまざまなイチゴ株の画像をAIに学習させ、高精度な検出モデルを構築しました。



ドローンの風を利用した生育観測技術を開発！

農研機構ではドローンを用いた新たなイチゴ栽培支援技術の先駆けとして、ドローンの下降気流を利用した生育観測技術を開発しました。ドローンの飛行時に生じる下降気流で葉をかきわけ、見えにくいイチゴの生長点を観測することができます。

また、観測した映像をAIで解析し、個々のイチゴ株を識別する技術を開発しました。これにより、新しい葉の発生など、個々の株の日々の成長の変化を把握することが可能になります。株の生育状態の把握や早期の収穫予測に活用できます。この技術は、経験の少ない生産者でも、データに基づいたきめ細かな栽培管理を可能にし、安定生産と品質向上に貢献するでしょう。今後は、ハウス内での安定飛行技術や下降気流の新たな活用技術の開発など、実用化に向けて研究を進める予定です。



農業機械研究部門 知能化農機研究領域 施設園芸生産システムグループ 深津 時広 グループ長
 農業機械研究部門 無人化農作業研究領域 小型電動ロボット技術グループ 坪田 将吾 主任研究員

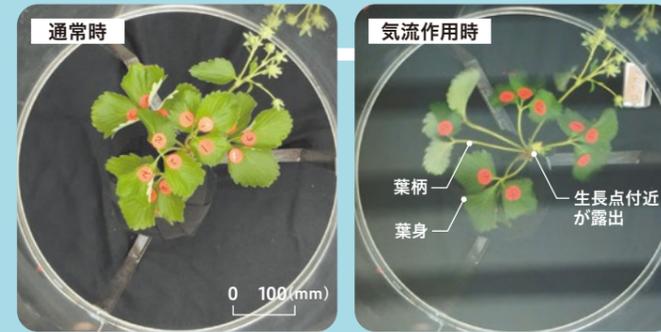
実用化に向けてさらに研究中!

施設栽培におけるドローンの活用は、精密農業の実現に向けた大きな一歩です。今後は、生育観測で得られたデータを活用し、環境制御や病害虫対策と連携させることで、より高度な栽培管理システムを構築していきたいと考えています。データ駆動型のスマート農業で、次世代のイチゴ生産を支えることを目指します。

ドローンでできる2つのこと

生長点付近の観測

ドローンの風で葉をかきわけ、隠れた生長点を捉えます。生長点から発生する新葉や花蕾の様子を撮影することができます。



NEXT STEP

ドローンによる受粉技術の確立

ミツバチの代替・補完として、ドローンの風による効率的なイチゴの受粉技術の確立を目指し、風量などを調査中です。

ハウス内でのドローン飛行を可能に

GPSの電波が届きにくいハウス内でも、安全かつ安定したドローンの飛行を実現するための自動制御技術の開発に取り組んでいます。

モニタリング情報の活用

一株ごとの生育データを時系列で詳細に分析することで、生育予測や病害虫の早期発見につなげるための研究を進めます。

画像処理で個体を識別

ドローンの映像をAIが解析。GPSの電波が届きにくいハウス内でも個々のイチゴ株の位置を識別します。個々の株の生育を時系列で比較することにより、新葉の発生や生長速度などの詳細な分析を可能にし、株の生育状況の変化を早期に把握することにつながります。



PICK UP

有機イチゴの生産拡大のために!

近年有機イチゴの消費者ニーズが高まっていますが、イチゴは病害虫の種類が多いことなどから有機栽培が非常に難しいとされ、その生産量はごくわずかです。そこで、中日本農業研究センターでは有機イチゴの安定生産技術体系の確立を目指し、さまざまな技術を組み合わせた栽培実証試験を行っています。



有機イチゴ栽培に利用できる主な技術

防虫ネット

有機栽培の基本は害虫を侵入させないこと。目の細かいネットで、徹底ガードします。

ハウス周囲の防草・防虫シート

害虫の発生源となるハウス周囲の雑草をなくし、虫を寄せつけません。

耐病性品種

イチゴの主要な病害(うどんこ病等)に強い品種を用います。



紫外線ランプ

うどんこ病耐性を高める効果のあるUV-Bを照射します。

光反射シート

UV-Bを反射して葉の裏にいるハダニの卵のふ化を抑制します。

天敵(待ち伏せ型)

畝の端にムギ類(右写真)を植えて天敵「寄生蜂」を飼う方法(バンカー法)や、害虫の天敵「カブリダニ」が中に入ったバックの設置により、害虫を待ち伏せします。



天敵(即効型)

害虫が発生してしまった時には、一気に広がる前に即効性の天敵を散布します。

有機イチゴ栽培のポイント

🍓 病害虫発生の予防

🍓 発生初期の防除

生産現場への普及を目指す!

これまで5作の栽培実証試験を行ってきましたが、大きな病害虫被害もなく概ね順調に栽培できています。よく「イチゴの有機栽培は無理だろう」と言われるのですが、この栽培試験に取り組むことで有機栽培は可能だということを示し、安定生産技術の生産現場への普及を目指します。

中日本農業研究センター
温暖地野菜研究領域 有機・環境保全型栽培グループ
(左から) 石崎 摩美 上級研究員 須賀 有子 グループ長補佐 山崎 浩道 領域長(取材当時)



開発のウラ話 Q & A

Q なぜイチゴで実験をしているのですか?

A 三重県との共同研究で「よつぼし」という品種に関する詳細な栽培データが蓄積されていたため、初期の実証実験の対象として適していたからです。

Q 生産者ではなく普及指導員で試験する理由は?

A AIはもっともらしい誤情報を生成する可能性(ハルシネーション)があり、普及指導員が確認・修正し、農家への不利益を防ぐためです。

Q 今後の展望は?

A 栽培技術だけでなく、経営支援や販売促進など、より幅広い分野をカバーするAIを開発し、全国展開できないか模索中です。

農業特化型AIの実証実験をイチゴで実施

国内初!

現在、農業現場の効率化を図る上でAI技術が注目を集めています。特に、長年培われた知識やノウハウをAIに学習させることで、若手の育成や農業に携わる人々の負担軽減につながることで期待されています。農研機構では、普及指導員を支援する農業特化型生成AIの開発に取り組んでいます。これは、単にインターネット上の情報を集約するだけでなく、各都道府県の試験研究機関やJAが持つ独自の栽培マニュアルや病害虫対策、地域の特性に合わせたノウハウなどの貴重なデータを学習させ、一般的なAIでは難しかった、

た、より実践的で信頼性の高い情報提供を目指す。このAIは普及指導員が日々の業務で直面するさまざまな疑問や相談に対し、迅速かつ的確な回答をアシストします。指導準備時間が削減されることで、生産者へのより丁寧なサポートを可能にすることが期待されています。本生成AIの実証実験が、イチゴの栽培現場で実施されています。精度の向上や現場の効率化アップに向けて有益な結果が得られています。



POINT

地域に特化した情報を提供

農業は気候や土壌など地域ごとに大きな違いがあるため、各地域特有のデータを追加学習させた地域専用ローカルモデルを開発。現場に即した情報提供が可能です。

複数のAIモデルで精度アップ!

複数のAIモデルを組み合わせ、それぞれの得意分野を活かし精度の高い回答を生成する「Mixture of Agents(MoA)」という技術を活用しています。

本研究開発の基盤となるのは、各地域特有の詳細な栽培データです。これらは気候条件、土壌特性など、画一的な情報からは得られない、農業の現場に即した知識の宝庫。従来の汎用的なAIでは困難であった、具体的で信頼性の高い営農支援の実現を目指します。農業経験の浅い方も的確な営農判断ができるよう支援したいという思いが、研究の原動力になっています。



農業情報研究センター
データ研究推進室
桂樹 哲雄 上級研究員

夏や秋にも収穫でき、お菓子にピッタリ



夏のしずく

【開発:東北農業研究センター】

シーズンオフの6~11月にも収穫できるようにと開発。普通のイチゴが花を咲かせない夏や秋にも開花します。

※青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県と共同育成



夏にも楽しめる!

産直サイト「食べチョク」が開催する「いちごグランプリ2025」で総合大賞を受賞しました!

うらかな春に、星のように輝く一粒



ほしうらら[®] 出願品種名: MA16-18-06

【開発:野菜花き研究部門】

果実が大きく、形や色味が整っていて美しい見た目。コクのある風味が特徴的で、観光農園で大人気の品種です。

※三好アグリテックとの共同育成

初夏のそよかぜをイメージして命名



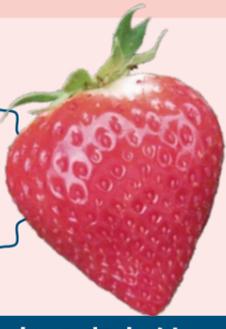
そよかき

【開発:東北農業研究センター】

イチゴの流通量が減る初夏でも、大粒で形のそろった実をならせます。きれいな円錐型で、爽やかな酸味を楽しめます。

※青森県、岩手県、秋田県、山形県と共同育成

夏に輝くあかりのよう!

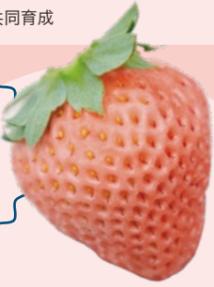


なつあかり

【開発:東北農業研究センター】

夏のイチゴは酸味が強いとされる中、なつあかりは甘みが際立つ品種です。光輝くような真っ赤な果実が目を引きまます。

コロんとしたフォルムは桃のよう



桃薫(とうくん)

【開発:野菜花き研究部門】

桃やココナッツに似た甘くフルーティーな香り。ピンクがかった見た目も愛らしい。従来のイチゴのイメージを覆す品種です。

作る人も食べた人にもさちあれ!



さちのか

【開発:九州沖縄農業研究センター】

果実の赤色が濃く、つややかな光沢がチャームポイント。約20年前に誕生したにもかかわらず、今でも根強いファンがいるのだとか。

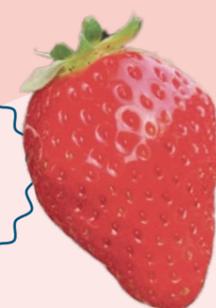
個性豊かな魅惑のイチゴ

イチゴの特長は品種ごとに多種多様!
農研機構では、香りに特長があるもの、ビタミンCを豊富に含むもの、夏においしく食べられるものなど、さまざまな性質を有するイチゴの品種を生み出してきました。その数はなんと26品種。皆さんが日頃から食べなれているものもあるかもしれませんが、農研機構生まれの品種のおいしさや特長に注目して、その多様さをお伝えします。

好みのイチゴの選び方

- 糖度** 品種によって甘さはさまざま。糖度が高いと甘く、濃厚な味わいになります。
- 酸味** さっぱりとした風味を残す酸味は、甘さを引き立ててくれます。糖度とのバランスが大切です。
- 硬さ** シーンや目的によって、適した硬さはいろいろ。果肉が柔らかいと生食に、硬いとスイーツづくりや輸送に向いています。
- 形** 先端がつんと尖っているもの、全体がまるいものなど、形も千差万別です。好みのフォルムを見つけてみては。

笑いぐぼができるほど、あま〜い果実



あまえくぼ

【開発:九州沖縄農業研究センター】

果実の糖度が高く、ほっぺが落ちるくらいのおいしさ。主にイチゴ狩りなどの観光農園で見ることができます。

作りやすいのにおいしさ抜群



恋みのり

【開発:九州沖縄農業研究センター】

果実が大きく、たくさん収穫できる上、生産しやすい点がポイント。食べると、爽やかな甘みが口に広がります。

恋がみのるように、イチゴを通して託された想いが叶うようにと願って名付けられました。

1粒にビタミンCたっぷり

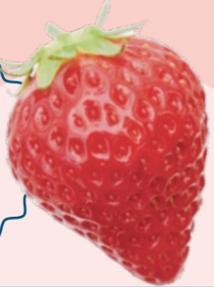


おいCベリー

【開発:九州沖縄農業研究センター】

ビタミンCを豊富に含み、その量は果実約7粒で1日分のビタミンCが摂取できるほど!酸味と甘みがほどよいバランスです。

種から育つイチゴの先駆的存在



よつぼし

【開発:九州沖縄農業研究センター】

三重県、香川県、千葉県、農研機構の4機関が開発したことから「よつ」ぼし。種から育ち、果実は濃厚で豊かな味わいです。

農研機構生まれのイチゴはほかにもたくさん!



キューピットドロップ

出願品種名: MS1615-01

イチゴでは珍しい観賞用の品種で、世界初となる完全八重咲の花は、そのボリューム感と淡いピンク色が魅力です。果実をつけるためには、人の手で授粉させる必要があります、その作業がまるでキューピットのよう。

※三好アグリテックとの共同育成



とよのか

1984年に品種登録されて以来、主に西日本で高いシェアを誇り、「西のとよのか、東の女峰」と呼ばれて親しまれています。柔らかい果実は甘くジューシー。日本のイチゴ開発の礎を築いた品種です。



農研機構 野菜花き研究部門
野菜花き品種育成研究領域
施設野菜花き育種グループ 研究員



小倉 真里奈

イチゴの品種開発で
生産者と消費者を笑顔に

小倉 真里奈 おぐら まりな
東北大学大学院農学研究所修士課程修了。大学では植物遺伝育種学の研究室でアブラナの研究に携わり、育種の基本を習得する。農業の発展に貢献したいとの思いから2021年農研機構に入職し、種子繁殖型イチゴの品種開発や輸出向けプロジェクトに従事。何事にも動じない冷静さには定評がある。リフレッシュ法は視界のひらけた場所から景色を眺めること。

「現在取り組まれている主な研究の内容を教えてください。」

私の専門分野は遺伝育種科学で、現在は種から苗を育てる「種子繁殖型イチゴ」の開発に取り組んでいます。イチゴの増殖方法には種子繁殖型のほかに、親株から伸びる茎(ランナー)を利用して子苗を増殖させる「栄養繁殖型」があり、国内で栽培されているイチゴの品種は後者が主流です。栄養繁殖型では、親株が病気や害虫に侵されると子苗に引き継がれる可能性があるので、いった課題があります。また、生産者はその年に収穫するイチゴの栽培と並行して翌年用の苗を育てており、多くの労力を費やしています。一方、種子繁殖型では種が病気や害虫を引き継ぐことはほとんどなく、クリーンな苗を育てやすいのが利点です。親株を管理する必要がなく、果実生産と育苗を分離できるため生産者の労力削減にもつながります。そのほか、輸出处向け品種の開発プロジェクトでは長距離輸送に適した果実の形質や収量性などの調査も行っています。品質の良い日本のイチゴは、特にアジア圏で贈答品として人気が高いようです。

「研究の醍醐味を感じるのとはどんなときですか。」

農研機構は国の研究機関で、国が掲げる目標の実現に向けて社会に役立つ作物や技術を開発することを目指しています。研究成果を直接社会に還元できるため、大きなやりがいを感じられます。

小倉さんの 研究道具

輸送包装試験機

トラックによる長距離輸送時の振動を短時間で再現できる機械。輸送時の振動によるイチゴ果実の傷みの程度を評価することができます。果実が柔らかいと傷みやすいため、輸出や長距離輸送には向きません。



想定するトラック輸送の条件により、振幅や振動数を調整できます。

また、研究の過程で実験や試験を行う際には事前におおよその結果を予想して臨みますが、実際に始めるとしばしば予想せぬ不具合が生じるものです。うまくいかなかったことは失敗と捉えられがちですが、私はその積み重ねこそが社会の役に立つ成果を得るための重要なプロセスであり、研究の醍醐味だと考えています。想定通りに進まなくても焦らず冷静に受け止め、研究者として力を発揮することが大切です。そのためにも日頃から十分に休息をとり、コンディションを整えておくよう心がけています。

「植物に興味を持ったきっかけや農研機構への入職理由をお聞かせください。」

高校の「生物」の授業で遺伝の仕組みを学んでから生物学全般に関心を抱くようになり、農学部に進みました。植物育種に興味を持ったのは、品質改良に関する講義で私たちの食生活が長年の研究による恩恵を受けていると知ったのがきっかけです。トウモロコシひとつとってみても、栽培が始まった当初と品種改良を経た今とは全く違う作物になっているといった話を聞いて、育種のロマンを感じました。そして植物遺伝育種学の研究室に入り、

アブラナの研究に携わりながら育種の基本を学びました。その中で、地道に実験や試験に取り組む研究が自分の性に合っていると気づき、研究者として社会に貢献したいと考えようになったのです。農研機構に入職したのは、大規模な組織で多様な分野の研究者が所属しており、研究を多方面に発展させるチャンスに恵まれた環境だと感じたからです。

「現在の部門に所属後、イチゴへの向き合い方に変化がありましたか。」

どこに行ってもイチゴに目が向くようになりました。食べたことのない品種を見つければ試みに食べてみたり、出張先ではどんな品種があるかをチェックして地域ごとの違いを確かめたりしています。私は農研機構に入るまでイチゴ栽培の経験がなく、初めは味の違いさえあやふやなほど。しかし甘みや酸味、香りや食感、色の違いなどに着目しながら多くのイチゴに触れるうちに、それぞれの品種の特徴を捉えられるようになってきました。プライベートでも、珍しい品種に出会ったときには写真を撮ったりメモを取ったりしています。さまざまな味の種類がある中でも私は甘みが濃いものが好みで、なかで

農家が直面する諸課題への対応策を見出し

日本の農業を元気にしたい。

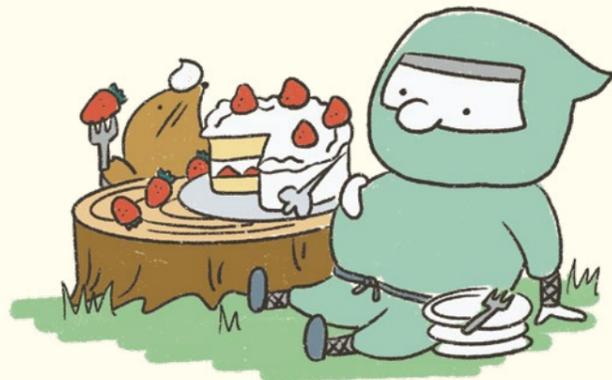


編集後記

普段は目にする事のない、農業の研究開発の現場。取材を通して知ったこと、感じたことを、農研機構に入構したばかりの新米広報部員「なるすけ」くんが綴ります！

イチゴのおいしさの裏側を訪ねて

今回はイチゴの育種現場を訪ねるべく、三重県安濃町の研究拠点へ出張してきました！敷地内に点在するハウスには数々の種類のイチゴがずらりと並んでいました。イチゴだ〜いすきな僕にとってはまるで楽園のような場所。そこでは、色や形、大きさなど、さまざまな特徴を持つイチゴに出会い、そのバリエーションの豊富さに驚きました。生でもおいしく食べられる上、お菓子づくりにしても大活躍のイチゴ。多様なニーズに応えようとする研究者の方々の熱意に触れて、イチゴが愛され続ける理由が分かったような気がします。おいしさを支えるたくさんの努力に感謝して、今日もデザートにイチゴをいただきます！



プレスリリース・2

画期的な播種技術で大豆の安定生産を実現！ 「ディスク式高速一工程播種法」を紹介

日本の食料自給率向上と食料安全保障の確立のため、ダイズの生産量増加は喫緊の課題です。一方で、近年多発する豪雨による湿害は、ダイズの収量を下げの一因となっており、湿害に強い栽培技術の開発が求められています。そこで農研機構は、省力かつ高能率で、大雨でも湿害を軽減して安定生産を可能とするダイズ播種作業のための「ディスク式高速一工程播種法」を開発しました。本播種法は、市販の「サイドディスクアタッチメント」を作業機の側面に取り付け、ムギを収穫した後に一工程でダイズを高速に播種する方法です。作業機の設定方法や播種のポイントを分かりやすく解説した標準作業手順書と動画を公開していますので、ぜひご覧ください。

標準作業手順書
「ディスク式高速一工程播種法を活用したダイズの栽培体系」
<https://sop.naro.go.jp/document/detail/177>



NARO Channel
ディスク式高速一工程播種法
-ダイズの湿害対策と規模拡大を可能にする画期的な播種法-
<https://www.youtube.com/watch?v=YlxkCFdcNTQ>



「ディスク式高速一工程播種法」によるダイズ播種の様子 (NARO Channelより)

(研究成果)大豆の安定生産と規模拡大を可能にする画期的な播種技術「ディスク式高速一工程播種法」
-専用アタッチメント市販化にともない標準作業手順書と動画を公開-



https://www.naro.go.jp/publicity_report/press/laboratory/karc/168560.html

【なるトピックス】では、農研機構の旬な情報や注目のアレコレを紹介！

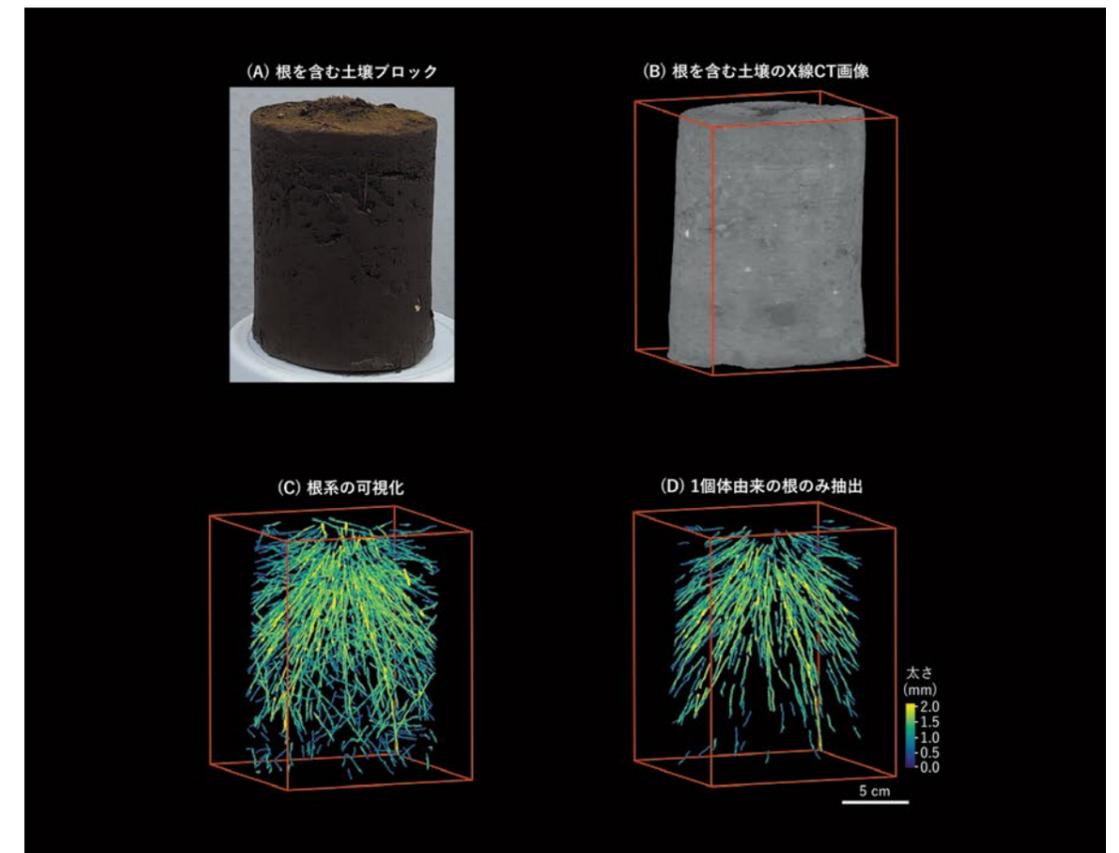
NARO TOPICS

no. 37

プレスリリース・1

X線CTで水田のイネの形態を可視化！ 低施肥栽培に適したイネ品種育成に貢献

肥料を効率的に吸収できるように作物の根の形態(根系)を良くすることは、非常に重要です。一方で、これまで作物の根系を調べるためには、ほ場から作物を根ごと掘り出して土を洗い流す必要がありました。この方法では労力がかかるうえ、根の形が崩れるため、根系の正確な評価は困難でした。本研究で農研機構は、X線CT(X線断層撮影)を用いて根の形を崩さずに水田で栽培したイネの根系を観察、計測する技術を開発しました。この技術を活用することで、低施肥でも効率的に肥料を吸収できるイネ品種の育成が期待されます。



X線CTを用いた土中の根系の可視化
(A) 水田から収集した土壌の塊(土壌ブロック)
(B) X線CTで撮影した画像
(C) 画像処理フィルタで根の情報を出し根系を可視化した画像
(D) 根の伸びる立体的な方向をもとに重なり合っている他の個体の根を除き、1個体由来の根のみを抽出した画像

X線CTを用いた水田のイネ根系の可視化



https://www.naro.go.jp/publicity_report/press/laboratory/nics/168782.html

PICK UP

なるチャンネル

NARO CHANNEL

動画で見る

「イチゴの農研機構育成品種」

特集2で名前の挙がった、農研機構が開発したイチゴ品種「なつあかり」と「恋みのり」を紹介する動画です。「なつあかり」は、一年中スイーツに欠かせないイチゴが品薄になる夏秋期にも収穫でき、食味に優れています。動画では、やはり夏秋季に収穫できる「豊雪姫」と「そよかの」も紹介しています。「恋みのり」は促成栽培向けの一季成り性で、大果かつ日持ち性に優れるとともに、収穫やパック詰め時間を大幅に短縮でき、これまでにない省力栽培が可能です。



夏でもおいしい
イチゴが出来ます

https://youtu.be/dw3GH5o_RPw



大粒で収穫・調製作業の
省力化が可能な
多収イチゴ品種「恋みのり」

<https://youtu.be/EBziqL2nzY>



CHECK

農研機構の旬な情報やイベントをチェック!



https://x.com/NARO_JP



<https://www.facebook.com/NARO.go.jp/>



農研機構は「みどりの食料システム戦略」を推進しています。

<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/midori/>



アンケートにご協力ください

今回の「広報なる」はいかがでしたか？
今後の誌面作りの参考にさせていただきますので、
ご意見をお聞かせください。
次号以降にご意見を掲載することがあります。

アンケート回答はこちら

NARO読者アンケート



https://prd.form.naro.go.jp/form/pub/naro01/koho_naro

